

—
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(ただし、特に指示のないかぎり、句読点等も一字に数えます。)

川原に住んでいた、クマネズミのタータと弟のチッチ、お父さんの三匹は人間の開発工事のため、住んでいた家を捨てて、上流に棲みかをもとめて旅立ちます。途中、凶暴なボスが支配する、ドブネズミ帝国の縄張りを避けて遠回りしようと思いますが、大雨にあい、一家がおぼれかけたところをドブネズミのグレンに助けられ、棲みかの図書館に案内されます。グレンは、ボスに対して反抗したため帝国を追われ、今は図書館に独りで暮らしているのです。

「人間たちは、なぜ『書く』とか『読む』とかするんだろう」とタータが独りごとのように言う。

「さあ」ひげをひねりながらグレンが答える。

「そして、図書館なんていう、こんな巨大なもので、どうして人間たちは作ったのかな」とタータがさらにつぶやく。

「さあ」グレンはしばらく黙って、やがて「怖いから、じゃないのかな」とぼつりとつぶやいた。

「怖いって……何が怖いの？」

「死ぬのが、怖いんじゃないのかな」

「僕だって、死ぬのは怖いよ」

あの満月のなかへ還ってゆく

そして口をつぐみ、目をつむってしばらくじっとしていた。タータは息が詰まるような思いでグレンの顔を見つめ、それから窓の外の満月を見つめ、またグレンの顔に目を戻した。いったい何だろう、この「言葉」は。やがて、グレンは夢から覚めたように目を見開き、照れくさそうにタータの方を見て、

「さあ、もう帰ろう。きっとお父さんたちが心配しているよ」と言った。

何日か過ぎた。ある晩、グレンがふと思いついたように、

「なあ、きみたちもここで暮らせばいいじゃないか」と言い出した。

「ここはネズミが暮らすには良い場所だよ。猫もカラスも入ってこないしね。ただ、定期的に行なわれる害獣駆除でやられないようにさえ気をつけていればいいんだ。そして、そのための方法はよく知っている」

お父さんとタータは顔を見合わせた。

「そう……タータはどう思う？」お父さんに訊かれて、タータは言葉に詰まってしまった。

「うーん……」川辺の巢穴を出立して以来起きた辛いこと、苦しいこととの記憶が、タータの頭のなかをぐるぐる駆けめぐった。これからまた外界に出て行って、あんなことをさらに嫌というほど経験するのかわかると、グレンの申し出はいかにも魅力的に映った。

「わからないや、ぼくには。チッチはどうだい？」

「ぼくはここが好きだよ、美味しいものがたくさんあるし、あったか

「うん……さあ、もうひと回りしよう。職員室の流しを見にいつてみよう。何か食べられそうなものが落ちてるかもしれないから」

さらに何日もタータたちはそこにとどまりつづけた。ある晩、三匹はグレンに先導されて下水管の中を伝い、図書館の裏庭に出た。久しぶりで外の空気に触れるのが楽しくて、タータとチッチは追いかけてこをしてたつぷりと遊んだ。美味しそうなドングリがたくさん落ちていた。皆はそれをつつとくわえて地下室との間を往復し、食料庫のたくわえはさらに豊かになった。

ある晩、タータとグレンが書庫内をぶらついているとき、窓から射してくる月光を浴びながら、不意にグレンが立ち止まり、何かを口ずさみはじめた。その日はたまたま満月だった。

「何？」とタータが訊いても、何も耳に入らないかのように、グレンは窓ガラス越しに見える皓々と輝く満月にじっと瞳をこらしながら、何かぶつとつぶやくつづけている。邪魔をしてはいけないような気持ちになって、タータがかたわらでじっとしていると、やがてグレンは、低いけれどもとてもよく透る声で、ひと息にこう言った――

「光の粒がぼくのうえに降ってくる

光の川がぼくを押し流してゆく

踏みとどまろうとしても

川床の砂はさらさらくずれるばかり

ぼくは溺れて 光のなかに溶け

きらめく無数の粒になって

いし」とチッチは言った。

「そうさな……どうしたもんか」とお父さんは言った。「とにかく、どうも有難う。ちよつと考えてみないと。何しろぼくらは、川を遡ろうということ、ずつと旅をしてきたんでね。急には頭が切り替わらない」

「川辺で暮らす楽しさはよく知っている」とグレンは言った。

「ただ、このあたりの川原はあいつらがのさばっているからね。はたして、きみらの新しい安全な棲みかが見つかるかどうか。そもそも川自体、ここからはかなり遠いしね。危険な旅になるよ。その危険を冒すだけの価値があるかどうか」

「そう……たしかに」とお父さんは難しい顔で言った。

グレンがピアノのなかに寝に行った後、三匹は小声でしばらく話合った。が、結論は出なかった。

「グレンはとても良いやつだし、ぼくらはここで平和に暮らせると思う」とお父さんは言った。「どうだ。それでいいかい、タータ」

タータは思わず頷きそうになったが、最後の最後で、どうしても引かかものがあった。

「うん……そうだね。ぼくにはわからないや」

グレンというネズミは何か不思議な深いものをたたえていて、一緒にいと、今まで味わったことのないような緊張と安らぎを同時に感じる。タータはグレンと別れたくなかった。たぶんグレンの方もそんなふうを感じているのだ。でも、川を遡ろうという一念でここまで続けてきた旅を、こんなふうにあつさり中絶してしまっているだろうか。

翌晩、タータとグレンはまた階上の書庫にいた。満月は少し欠けていたが、その晩も明るく月夜だった。

「グレンさんも死ぬのが怖い？」とタータは何となく言ってみた。

「もちろんさ」

「グレンさんと初めて会ったとき……あの水浸しの段ボール箱から出て、石段のうえで……あのときはもう本当に、死んじゃうと思った」

「怖かったかい」

「怖いというのもあったけど、何だか、腹が立つっていうか……こんなところで、こんなわけのわからない街中の建物の蔭で、ただ無意味に死んでゆくのかって思った……」

「じゃあ、どこでなら死んでもいいと思うのかい、きみは」

「どうかな……」そのとき、突然タータの頭のなかに広がったのは、夕暮れの川の光景だった。大きな夕日が地平線に沈みかけていて、その間も川水は優しいせせらぎとともに流れつづけている。さざ波のうえには何かを語りかけてくるように、招くように、夕映えのきらめきが踊っている。あたりがだんだん暗くなつて……そんな光景を追いながら物思いにふけていたのかもしれない。不意にグレンの声が聞こえてきて、タータははっとした。

＊「生きるとは 戻ってゆくこと

生誕のみなもとへ還ってゆくこと

安らかな川の流れにあえて逆らい

泥にまみれ 血を流し

敵と戦い 戦いの後に熟睡し

タータたちは頷いた。

「そこで、もう一つの道だ。この地下から、川まで真っ直ぐに延びている下水道がある。それを行けばいい。わかりやすいし、直線距離だから、地上に行くよりはるかに近い」

「何だ、ものすごく簡単じゃないか」とお父さんが拍子抜けしたように言った。グレンはにっこり笑って、

「そうだね。ただ、その話は実は、以前ここにいた仲間のひとりから聞いただけで、ぼく自身が実際にそのトンネルを抜けたことがあるわけじゃない。もうぼくは川には近寄りたくもなかったからね。ただ、そいつは信用できる立派なネズミだったから、十中八九、確実な話だと思う。試してみる価値は十分ある」

「試してみよう」とお父さんは言った。「ただ、その下水道にもやつらがうろちよろしてるんじゃないのかい」

「それだ。そいつの話では、下水道の向こう側の出口は川の上流寄りだ、そのあたりはもうドブネズミの縄張りの外だというんだ。だから、その下水道にはやつらは入ってこないんだと」

「本当かな」

「何とも言えない。そいつが知ってた頃はそうだったとしても、今はまた状況が変わっているかもしれないし。しかしね、もしドブネズミたちがその下水道に出没しているとしたら、この図書館にだって遅かれ早かれ、一匹や二匹、姿を見せたっていいはずだろう。今のところそういうことはまったくないからね」

少しの間、重苦しい沈黙のなかで、四匹はそれぞれの考えに沈んでいた。

また起き上がって どこまでも

どこまでも ぼくは歩きつづける

川の光を求めて

川の光を求めて

タータはいつの間にか、肩を震わせて泣きじゃくっていた。グレンがその肩を抱きすくめ、タータの頭を優しく撫でていた。

「わかった、わかった。泣くんじゃない」

「グレンさん……」

「うんうん。きみはいい子だな」

しばらくそうしていて、タータの泣き声がヒック、ヒックというしゃくり上げになったのを見はからい、グレンはすつくと立ち上がった。そして、

「さあ、おいで。地下室へ戻ろう。川辺へ帰ってゆくための、いちばん良い行きかたを教えてあげる」と言った。

地下室に戻るとグレンはすぐ、

「いいかね、ここから川へ行く道は二つある」と話しはじめた。夜の散歩から帰ってきたグレンとタータの顔を見て、お父さんはたちまち何かを察したようで、何も言わず即座にグレンの話に注意深く耳を傾ける態勢になった。

「一つは、きみたちが辿ってきた道程をそのまま続けて、人間の道路を行くことだ。しかし、これは難しいし危険だと思う。道は曲がりくねっていて、ぼくにもよくわからないし、しかもここはまだドブネズミ帝国の縄張りのきわだから、あいつらの番兵に出くわす恐れもある」

「試してみよう」ともう一度お父さんが言った。「もしそれが本当なら、下水道から川に出た時点で、もうぼくらは、ぼくらの旅の最終目的地に着いたことになる」

「もつと早くこの話をしなかったのを許してくれたまえ。ぼくはきみたちが行ってしまうのが、何だか淋しくてね」グレンはかすかな照れ笑いのようなものを浮かべていた。

「いいさ」お父さんも笑顔になっていた。「ぼくらだって、もういつそのこと、ここに棲みつこうかという気持ちに半分くらいなつてたわけだし」

「もちろん、きみらに出発の決心が固まったら、すぐに言おうと思っていた。それに、もう一度言うが、今の状況がどうなっているかは、ぼくには何とも言えない。もし狭い穴の中で凶悪な兵隊ネズミに出くわしたら……どこにも逃げ場はないしね……」

また、沈黙が下りた。その重苦しさを吹き飛ばすように、「そのときはそのときさ」とお父さんが陽気な声を上げた。「何とかなる。これまでも何とかなつてきたんだし」

それでタータたちはすっかり元気になった。あと一日ゆっくり休んで、翌日の晩に出発ということに話が決まった。

川へ！ できるだけ体を休めておくように言われたのに、タータは興奮のあまり深くは眠れなかった。川べりに咲く花々の芳香をうつとりと嗅いでいる夢だの、下水道で前にも後ろにも黒々とした怪物が立ちまわっている、進退きまわってしまった夢だのが交錯して、何度か目覚めては、まだ図書館の地下にいる自分に気づいて不思議な気持ちになった。

夜になった。グレンに先導されて三匹はまたあのほこりだらけの部屋に出て、その乾ききった洗面台の排水孔のなかにもぐりこんだ。

「落ちないように……ゆっくりゆっくり」

タータに続いて、チッチを首にしがみつかせたお父さんが無事にいちばん下まで着いたのを確認すると、「こつちだ」と言つてグレンは横穴をどんどん進みはじめた。二股の分かれ道がいくつかあり、下り勾配がどんどん急になっていつて、ほどなく直径七十センチほどの太いトンネルにすぽんと出た。底に厚い汚泥が溜まったうえを、濁った水が流れていて、ひどい腐敗臭が立ちこめている。

「さあ、ここだ。これを下つていけばいい、はずだ」グレンはお父さんとチッチの肩に手を置いた。それからタータをぎゅっと抱きしめた。「もう会えないだろうな。淋しくなるなあ」

「グレンさん……」

「なあ、タータ、『書く』ことも『読む』こともできないのは、われわれネズミ族の幸福なんじゃないのかな。ぼくはそう思うんだ」

(松浦寿輝『川の光』中央公論新社より)

※1 皓々と……白く明るいさまで。

※2 出立……旅立つこと。

※3 芳香……よい香り。

※4 交錯……いくつものものが入り交じること。

※5 腐敗臭……腐ったいやな臭い。

ウ 満月の光を浴びるうちに詩人の血が騒ぎ、本当は聞かせたくないタータに、普段は秘めていた心の内を包み隠さず歌い上げたことに気づきあわてた。

エ タータに自分の思いを伝えたいと考えてはいたものの、月の光の中で気持ちが高ぶり、幼いタータに対しては突然難しいことを言ってしまったと気づいた。

問三 —— 線3「ふと思いついたように」とありますが、ここでのグレンについて述べたものとして最も適当なものを次の中から

選び、記号で答えなさい。

ア グレンはタータ一家の行く末が悲劇になることを十分わかってはいたが、さすがに彼らの希望を打ちだくことをためらっていた。だが、ついにたまりかね、さりげない風を装って話を切り出した。

イ グレンはタータたちに図書館での安全な生活を共にしようとして提案した。実は自分を追放したドブネズミ帝国に対抗するため、一人でも多くの仲間が欲しいと思っており、その機会をねらっていた。

ウ グレンは日ごろからタータたちと図書館で一緒に暮らしたいと願っていた。しかし、実際にそのことを口に出すのは、自分の弱さを見せてしまうようで恥ずかしいので、何気ない口調で伝えた。

エ グレンはタータがものごとの深いところまで感じることができると思っていた。そこで、安全な生活を続けることをあ

問一 —— 線1「息が詰まるような思い」とありますが、このときのタータについて説明したものとして最も適当なものを次の中から

選び、記号で答えなさい。

ア タータは、「言葉」に込められたグレンの思いについては理解できないものの、その「言葉」の大きな力を感じ、緊張している。

イ タータは、時間の流れを満月に輝く光の川と表現しているグレンの「言葉」に深い感動と共感を覚え、身の引き締まる思いを抱いている。

ウ 命あるものは全て死ぬ、と冷静にうたうグレンの「言葉」に、タータは自らもいずれ死ぬのだという事実を突きつけられ、恐怖を感じている。

エ タータは、自分がぼんやりと抱いていた川に対する深い思いをグレンが感じ取り、はつきりとした「言葉」にして表現したことに驚いている。

問二 —— 線2「照れくさそうに」とありますが、この時のグレンの気持ちを説明したものとして最も適当なものを次の中から

選び、記号で答えなさい。

ア 月を見るうちに世界の不思議に思い至り、心の中にわきあがった思いを抑えきれなかったものの、タータには通じない「言葉」について親切に解説しなかったことを後悔した。

イ 常日ごろからタータが自分のよき理解者となることを期待していたので、彼の死の恐怖を取り除いてやろうと「言葉」にしたが、幼いタータには無意味だと思った。

問四 —— 線4「タータはどう思う？」とありますが、このときの「お父さん」の気持ちを説明したものとして最も適当なものを

次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 内心ここに残って安全な生活をしたと考えていたが、川を遡る旅に息子たちを連れ出してしまったので、自分の口からは残ると言いだしにくかった。

イ グレンの厚意はありがたかったが、自分は川を遡る気持ちを持ち続けているので、息子たちの意見を確認しつつも旅を再開する決心を促したかった。

ウ タータがグレンになついているので、自分たち親子の今後を親身に考えてくれている気持ちにこたえ、息子たちが賛成なら残ろうと思った。

エ 自分としては図書館に残っても川へ戻ってもよいので、旅の困難を理解させた上で生活の場所をどこにするか、息子たちに判断をゆだねたいと思った。

問五 —— 線5「どうしても引かかものがあった」というタータの気持ちを表現している一文を文中からさがし、初めの五字を

抜き出しなさい。

問六

*「生きるとは……」の詩から読み取れる、タータに対するグレンの思いを述べたものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分や父親とのやりとりの中で旅を続けるべきだと自覚し始めたタータの後押しをしようという思いが込められている。
イ 相手がどんなに強い敵であっても信念を貫き、死を恐れず戦い続けるべきだという思いが込められている。
ウ ドブネズミ帝国に対して再び立ち上がろうとする自分と共に戦う勇気を持つてほしいという思いが込められている。
エ 死を恐れるタータは、戦いに向かう自分にとっては足手まといなので立ち去ってほしいという思いが込められている。

問七

線6「タータはいつの間にか、肩を震わせて泣きじゃくっていた」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア グレンの「言葉」を聞いて、自分たちはもうここにはいられないと気づき、旅立つ決心はしたものの、待ち受けているドブネズミ帝国との戦いが恐ろしくなったから。
イ グレンの「言葉」から、生きものはいつかは死ぬことがわかり、同時に自分も死を避けられないという運命のはかなさを悟ってしまったから。
ウ 何か深いものをたたえたグレンの「言葉」を今度は理解でき、旅立ちを決心したが、それは同時にグレンとの別れであることを悟ったから。

エ グレンが再び危険な戦いに臨むことを決意し、死を予感していることが、今回のグレンの「言葉」によってわかり、悲しくなってしまったから。

問八

線7「拍子抜けしたように言った」とありますが、なぜですか。「ように」という表現に注意して、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア グレンの説明してくれた川へ行くための道が予想以上に簡単であることをことさらに強調して、子どもたちを勇気づけようとしたから。
イ 川へ戻るにはきつとたやすい方法があるにちがいないと思っていたが、グレンの説明を聞いて予想通り簡単なことだとわかり、ほっとしたから。
ウ 川への行程の困難さをあれこれ心配していたが、それが思いのほかに簡単だったため、早く教えてくれなかったことに對する非難めいた気持ちを強調したかったから。
エ 図書館での暮らしを続けるつもりでいたのに、川への道を示され、グレンの親切が口先だけのものであることがわかり、がっかりしたから。

問九

線8「書く」ことも「読む」こともできないのは、われれネズミ族の幸福なんじゃないのかな」とありますが、1ページの「」を参考にして、このように述べるグレンの考えとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

正宮をはじめ百以上もある別宮などから、神宝や橋までを、二十年に一度造りかえるのが式年遷宮で、それが「a」千六百年にわたって受けつがれているという。膨大な費用と労力を必要とするこの儀式は、神の姿はつねに清らかであるべきだという精神にもとづくものだとされる。では、なぜ二十年ごとなのかというと、そこが技能の伝承に深く結びつく。

神社や橋を造るためには、たくさんの技術者が必要だということ、だれにでも想像できる。大工だけではない。たくさんの金具を作る鍛冶屋も必要だし、こまかな細工をする指物師もなくてはならない。橋の欄干の葱坊主の形をした擬宝珠を作るのは、飾り職人と呼ばれる人たちだろうか。

そういうたくさんの技術者がいなければ、神社も橋も造ることはできない。そして、その仕事にたずさわる人たちの技能が、親から子へ、師から弟子へと絶えることなく伝えられてゆくためには、二十年に一度は造りかえる必要があるのだという。つい最近までは人生五十年だったことを考えれば、二十年は世代交替のサイクルとして、理にかなう。

ものを作る技というものは、言葉や文字だけでは伝えられない。

b 手や体をとおして、実際に体験しないと伝わらない。父親や師が体験してシユウトクした技を、つぎの世代の息子や弟子に伝えるためには、父親や師が生きているうちに、若い息子や弟子に体験させる必要がある。二十年に一度造りかえれば、技は確実に伝承される。こうして、伊勢神宮の式年遷宮は、千六百年の歴史をかさねてきた。たぶん、世界の建築史上でも稀なことだろう。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(ただし、特に指示のないかぎり、句読点等も一字に数えます。)

三重県にある伊勢神宮は、鎮座から二千年余りといわれるから、仏教が大陸から日本に伝来する以前の、人びとのシンコウのありようを語るさまざまな神事(儀礼や行事)が残っている。そのひとつが式年遷宮である。

ゆだねられた三条の鍛冶屋さんたちは、ずいぶん苦勞があつたと思う。和釘を打つ技は、直接には伝えられてはいなかったのだから。しかし、**d** 伊勢神宮の仕事となれば、メイヨなことだから尻こみはできない。

岩崎さんをはじめ六人の鍛冶師が中心になって、二十軒の鍛冶屋さんが三年かかって、この五十数種八万本の和釘を打ったという。

和釘ひとつをみても、式年遷宮がどれほどの大ジギョウかということがわかるというものが、三条の鍛冶屋さんたちは、これを契機に、つぎの二十年後の遷宮も自分たちの**X**でと、技術伝承委員会を作つて、若い人を育てているという。

その岩崎さんの仕事場をたずねて、和釘の見本を見せていただいたことがある。

なるほど、ズンドウで先のほうだけ細くしたのを力まかせに打つ洋釘とはちがう。丸釘もあれば角釘もある。打ちこんだあとでゆるんで抜けることのないように、胴の部分を大根おろしのおろし金のように刻んだものもある。そういう大小さまざまな釘を火造る鍛冶師の技に、いちいち見とれてゐるわたしに、岩崎さんが声をかけた。

「この釘を見てください。これがなんだかわかりますか」

テーブルにらんだサンプルのなかから、岩崎さんが手にしたのは、五寸（約十六センチ）ほどの長さの四角い釘で、元から先までがゆるやかに細くなつてゐた。そしてその釘の頭部は、ほかの釘のようにたいらではなく、断面を書けば、の字のようにまがつた頭だった。むしろわたしは、生まれてはじめて、そんな形の釘を見たので、たずねられても、**③** ケントウがつかなかった。

一九九三年。この年がちょうどその二十年目の遷宮にあたつた。新潟県三条市は古くから鍛冶の町として知られるところだが、その地でずっと日本刀や小刀、剃刀や印刀といった刃物を作りつづける岩崎重義さんという鍛冶師がいる。十数年来、わたしが鍛冶についていろいろ教わつてきた人だが、その人が一九九三年の遷宮にはじめて、鍛冶師として参加した。正確には、岩崎さんが音頭をとつて、三条のおおぜいの鍛冶屋さんが参加した、のだった。和釘を作る仕事だった。

いまわたしたちが釘とよんでいるのは、ヨーロッパから伝えられたもので、洋釘である。それとは別に、日本には古くから独特な形をした釘があつた。それを和釘とよぶ。神宮の造営にも、たくさん和釘が使われてきた。その和釘だけで、およそ五十種類、八万本のほるといふ。和釘のひとつひとつについて設計図があり、鍛冶屋さんはその設計図にしたがつて、一本一本を火造らなければならない。火造りとは、鋼の材料を火で加熱して、やわらかいうちにハンマーでたたいて必要な形にする作業をいう。

その鍛冶仕事は、これまではずっと、伊勢周辺の鍛冶屋さんに伝えられてきた。伊勢のあたりは昔から漁業のさかんところだから、伊勢湾周辺には漁師がたくさんいて、そのための船大工がいた。船大工がいれば、船鍛冶もいた。造船に必要な釘や碇は、船鍛冶が作った。ところが、戦後はプラスチック船がふえて、木造船はほとんど姿を消した。そうなると船大工も船鍛冶も減りつづける。そして**c** 伊勢では、神宮の造営に必要な和釘を火造ることが不可能になつてしまつた。伝統が切れて、あらたに、新潟県三条の鍛冶師たちに、その仕事ゆだねられたのだった。

「最初は、わたしたちもわからなくてねえ。しかし、そういう図面なんだから、そのとおり作るしかないだろうって。作るのにも苦勞しましたが、ともかく作つてね。それで、試しに打つてみようということになりました。木に打ちこんでみて、はじめてわかりました。この頭は、ショック・アプソーバーだったんですよ」

の字状に曲げた和釘の頭は、ちょうどスプリングのようになって、ハンマーでたたいた衝撃を緩和させる役割をはたしている。

「この頭がつぶれないように、ゆつくりと打て、ということですよ。うすれば、こんな太くて長い釘でも、木を傷めない、木を割らない。木に優しい釘です。これはまさに、木の文化です。力まかせに打つ洋釘とはまるでちがうんです。すっかり打ちこんだら、最後の一撃を力をこめる。すると頭はたいらになつてしまふんです」

現代の鍛冶屋である岩崎さんが、昔の鍛冶屋の工夫に**Y**を巻いて、それを**3**本の文化だという。

その言葉は、技術の根源を鋭くいいあててゐる。技術とはなにか。なんのため、だれのためにあるべきものか。そのことをいいあててゐる。鍛冶の仕事とはなにか。和釘はなんのために必要なのか。それがわからなかったら、このような、作るのたいへん手間のかかる和釘は生まれなかったにちがいない。それだから岩崎さんは、鋼を打つ鍛冶の仕事を**3**本の文化だといったのだった。

最近、人に優しいとか、地球に優しいという言葉が流行語のように使われるが、昔の鍛冶師が、木を生かすためにどんなに心を配つて工夫をかさねたかを、この和釘一本がみごとに語つていて、わたしたちに教えてくれることはおおい。

こうして三年がかりで八万本の和釘を打った三条の鍛冶屋さんたちは、一九九三年の式年遷宮の立柱祭に招かれた。そのときの写真も拝見した。白装束を身につけて、行列の先頭に神官が立ち、つぎが鍛冶師で、大工さんはそのうしろだという。

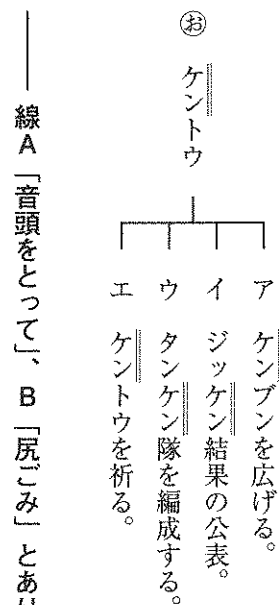
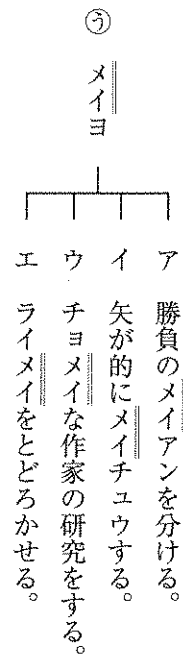
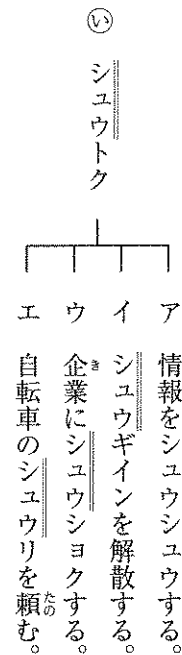
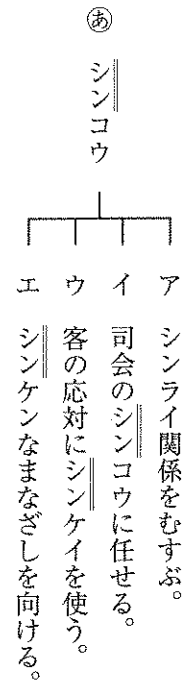
「大工さんの道具を作るのも鍛冶屋です。鍛冶屋がいなければ、大工さんも仕事にならない。お伊勢さんは、技術をわかつておいでだと思ひました」

岩崎さんは、まんざらではなさそうに笑つた。

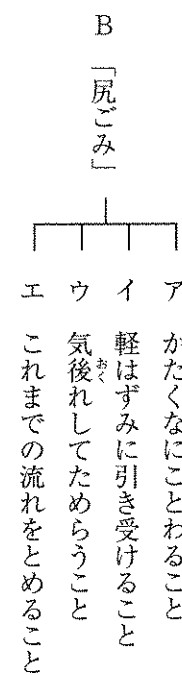
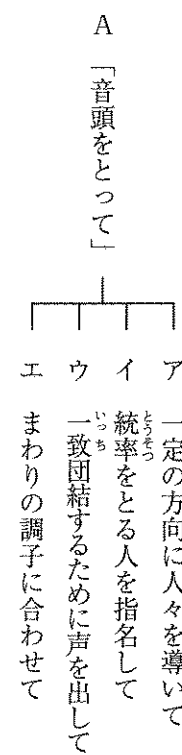
（小関智弘『町工場・スーパーなもののづくり』筑摩書房より）

- ※1 伊勢神宮：正宮を中心に、別宮など百以上の宮をあわせ持つ日本有数の神社。「お伊勢さん」の呼び名で親しまれ、古くから伊勢の地に構えている。
- ※2 指物師：机やたんすなどを作る職人のこと。
- ※3 橋の欄干の葱坊主の形をした擬宝珠：橋の側面に材木を渡して人の落ちるのを防ぐ手すりに、飾りとして擬宝珠（葱の花のふくろ状になつてゐる部分に似ている）を配したことをさす。
- ※4 契機：きっかけ。
- ※5 ズンドウ：上から下まで太さが変わらないさま。
- ※6 立柱祭：式年遷宮の時、正宮建築の初めに御柱を立てる儀式で、新殿の建築の安全を祈る。

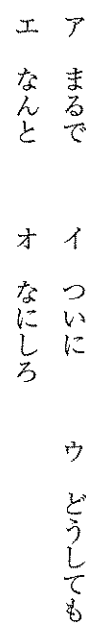
線①②の漢字と同じ漢字をふくむものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。



問二 線A「音頭をとって」、B「尻ごみ」とありますが、ここの意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。



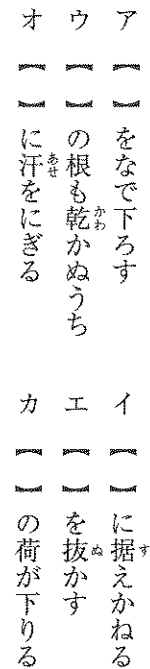
問三 a d に入る言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものを二度使ってはいいけません。)



X・Yについて。

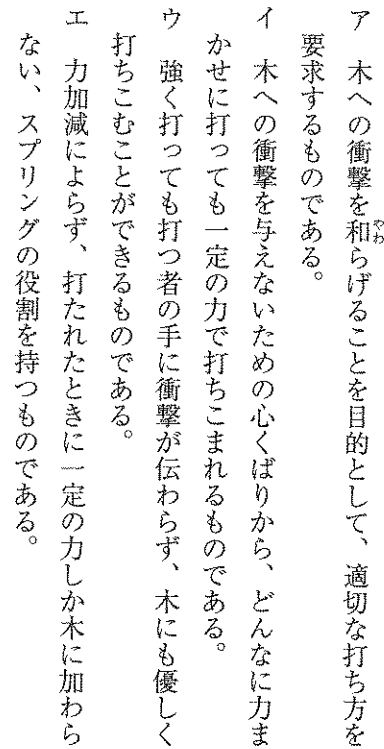
(1) X・Yに入る適当な漢字一字をそれぞれ書きなさい。

(2) 次の「」の中(1)のX・Yと同じ漢字一字を入れて慣用的表現になるものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。



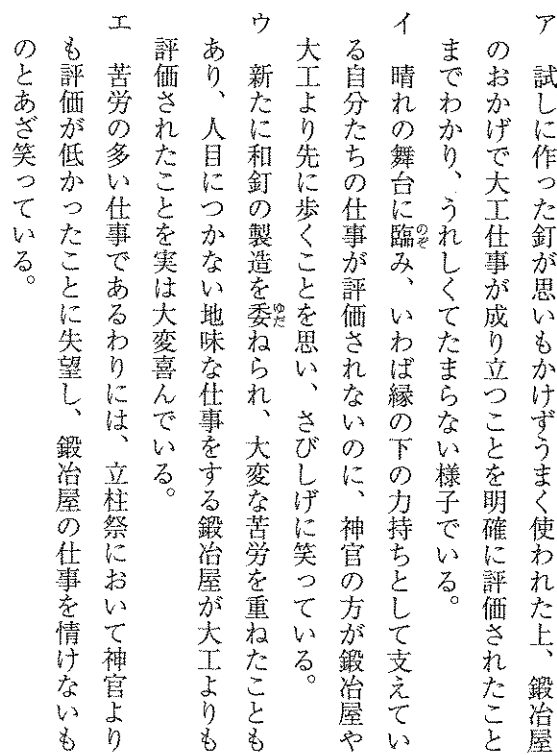
線1「伊勢神宮の式年遷宮は、千六百年の歴史をかさねてきた」とありますが、式年遷宮を行う理由を二つ簡潔に説明しなさい。

問六 線2「そんな形の釘」とありますが、これについて説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。



線3「木の文化」とありますが、本文をふまえてその内容を三十字程度でわかりやすく説明しなさい。

問八 線4「岩崎さんは、まんざらではなさそうに笑った」とありますが、このときの岩崎さんの様子を説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。



問九 次の中から筆者の考えに合っているものには1を、合っていないものには2を、それぞれ解答欄に書きなさい。(ただし、すべて同じ記号の場合は採点の対象外とします。)

ア 千六百年に渡り受けつがれている式年遷宮は、卓越した技術を持つ多くの技術者によって今なお実現されている。

イ 現在では簡単に製造でき、力まかせに木に打ちこむ必要のない洋釘が広く用いられている。

ウ 時代の移り変わりとともに木造船が姿を消すと、船大工や船鍛冶が廃業し技能の伝承は途絶えることになる。

エ 岩崎さんが和釘づくりを始めたのは、鍛冶仕事は何たるかを知りたいと思ったからである。

オ 三条の鍛冶師たちは、神宮を建てるのにふさわしい和釘を全くの手探りの状態から造らなければならなかった。

カ 三条の鍛冶師たちが打った釘は、並々ならぬ研究と努力の積み重ねによってできたものである。

キ 人に優しい、地球に優しいという考え方は、今日的なものではなく、古くからあった。

問五

問六

--

問七

--

問 八

問 九

問	
あ	
い	
う	
え	
お	
問	
A	
B	

問	→
a	
b	
c	
d	

問 四	
(1)	
X	
Y	
(2)	
X	
Y	

問 五

問
六

[illegible]

問八	
問九	
ア	
イ	
ウ	
エ	
オ	
カ	
キ	